

山武の森から

1 旧管理棟等の解体撤去工事完了

令和5年度は旧管理棟や第一研究棟などの施設の解体撤去工事が実施されていましたが、その工事も令和6年3月に完成し、2年ぶりに静かな試験研究環境が戻りました。



また、旧管理棟跡地は簡易舗装が施されたので、お車でお越しの場合、駐車スペースとして利用可能となり、利便性が向上しました。

2 スギ優良品種の試験林造成

令和5年度末に正門から新管理棟への進入路の右側に、山武地方の大杉系統スギ品種の試験林を造成しました。成長や病虫害抵抗性、雄花着花性等のモニタリングを目的としており、少なくとも50年は維持する計画です。



3 業務運営の見直し

(1) 研究体制の変遷

①研究室長体制 (S39. 5. 1～H19. 3. 31)

草創期を除き、研究歴が長く、研究に精通したベテラン研究員が、研究室長に任命され、2～4名の研究室長を中心に、研究分野ごとに試験研究や後継研究員の育成が行われていました。

②主幹体制 (H19. 4. 1～H20. 3. 31)

全研究室が統合・廃止され、研究歴の長いベテラン研究員が、新たに設けられた主幹職に任命され、主幹1名が、全研究分野、全研究員を指導する体制となりました。

③所長直轄体制 (H20. 4. 1～現在)

森林研究センターは、農業部門の研究センターに統合され、新たに森林研究所となり、所長が全研究分野、全研究員を指導する体制となりました。

(2) 業務運営の見直し

本県における研究員は、研究職採用ではなく、森林研究所の場合、林業職採用の技術職員が配属されますが、以前は、異動がまれであったため、研究分野ごとにベテランが在籍していました。近年は、他の組織との人事異動が普通となり、育成に時間を要するベテランは減少し、昨年度から、ベテラン全員が再任用となっています。このため、ベテランに依存する業務運営から、組織で対応する業務運営に変える必要があるため、チーム制の導入など、業務運営の見直しに取り組んでいます。

(所長 村井和之)

広葉樹造林におけるシカ防護柵の効果

近年、スギ・ヒノキ以外の多様な森林の育成を望む森林所有者等の意向を背景に、災害に強い森づくり事業などの森林整備事業において、コナラ等の広葉樹苗木の植栽が散見されるようになってきています。しかし、シカやキョンの生息地域では、これらの広葉樹がスギ・ヒノキよりも食害を受ける場合が多いため、苗木を植えても食害を受け、森林の更新が阻害されることが懸念されます。シカ、キョンを対象とした対策としては、単木防護資材よりも低コストに設置できるネット防護柵で造林地全体を囲む方法が一般的です。しかし、イノシシやノウサギが穴をあけ、その後にシカが侵入して食害する被害や、イノシシの掘り返しによる苗木の倒伏及びノウサギによる食害が近年問題になっています。このようにシカ・キョンだけを対象とした防護柵ではなく、多様な獣類による被害に対応した防護柵の設置が必要です。そこで、森林研究所ではシカやイノシシ、ノウサギ等の多様な獣類による被害の発生が懸念される伐採更新地の調査地4か所において、ネット防護柵の下部にワイヤーメッシュやトタン、遮光ネットなどを組み合わせた防護柵について検証しています。

これまでの調査の結果、各防護柵の設置区では苗木が順調に生育している一方で、柵を設置していない無処理区は苗木がすべて食害を受け、累積の食害により枝葉がほとんどなくなり矮小となっていました。

令和5年6月から10月までの調査で、苗木の生存率の推移は、各防護柵の設置区では生存率の減少が調査地4か所の平均で-4%であったのに対し、柵を設置していない無処理区では-13%と枯死が多く発生していました。無処理区の苗木は、食害を受けても萌芽するためすぐには枯死しませんが、雑草との競争に負けて被陰等で徐々に枯死していくと考えられました。

樹高成長は、各防護柵の設置区では成長が良好で、調査地4か所の平均で+31%でした(図1)。一方、柵を設置していない無処理区では-8%と樹高が低くなっており、成長が認められませんでした。

これまでのところ、多くの防護柵で獣類や強風が原因と思われる破損が数回認められた一方で、ネットにワイヤーメッシュを組み合わせた防護柵(写真1)は破損が認められず、多様な獣類や強風による破損に強いと考えられました。これはワイヤーメッシュの強度が高く、固定用の竹支柱の効果等で風の影響も受けにくいことが要因と考えられます。

今後も、防護柵の種類の違いによる苗木の生育や耐久性を引き続き調査してまいります。

(主任上席研究員 岩澤勝巳)



写真1 ネット+ワイヤーメッシュ防護柵

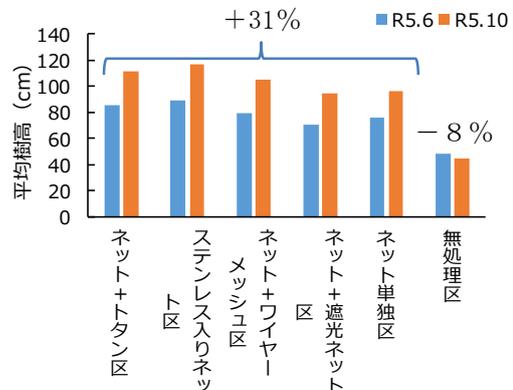


図1 各防護柵と無処理区における令和5年6月と10月の樹高の比較

注) 調査地4か所の平均で、各調査地は令和3~4年春の苗木植栽の概ね1年後に防護柵を設置

森林研究所の動き

研究職員と担当研究分野

令和6年度の研究体制は次のとおりです。

所 長 村井 和之

主任上席研究員 宇川 裕一

(林木育種等 (主担当: 林木育種)

及び同総括)

主任上席研究員 岩澤 勝巳

(森林造成等 (主担当: 森林造成・管理・経営、

特用林産) 及び同総括)

研 究 員 小林 真生子

(森林造成等 (主担当: 森林防災、環境

保全))

研 究 員 福原 一成

(森林造成等 (主担当: 森林虫害))

研 究 員 黒瀬 弘毅

(森林造成等 (主担当: 木材・木質バイオ

マス))

研 究 員 向井 愛美

(林木育種等 (主担当: 森林病害、花粉

飛散))

研 究 員 松島 一浩

(林木育種等)

注:()内は担当研究分野

(2) マテバシイにおける NCS くん蒸薬剤の
カシノナガキクイムシ殺虫効果 (福原一成)

・3月8～11日 第135回日本森林学会大会が
東京農業大学世田谷キャンパス及びオンライ
ンで開催され、以下の1課題を発表しました。

(1) 海岸クロマツ林の植栽密度が植栽9年目
の生存率及び樹高成長に及ぼす影響 (小林
真生子)

・3月19日 スギ花粉発生源対策推進方針検討
会が林野庁により書面開催され、福島主任
上席研究員が出席しました。

人事異動

3月31日付け

福島 成樹 退職

安川 光生 退職

4月1日付け

小林 沙希 転出 (森林課)

桐澤 凜 任用替 (自然保護課)

渡邊 多恵 転出 (県立成田西陵高等学校)

宇川 裕一 転入 (森林課)

松島 一浩 臨時的任用

鶴殿 友貴 転入 (保険指導課)

圓城寺 健人 新規採用

(編集責任 主任上席研究員 宇川裕一)

刊行物

1 千葉県におけるナラ枯れ被害の現状と被害
対策としての森林管理 (農林水産技術会議
技術指導資料 令和6年3月発行)

主な会議・行事 (令和6年1～4月)

・2月28日 YouTube「千葉県公式セミナーチ
ャンネル」において第61回試験研究成果発表
会として林業部門2課題の動画配信を開始し
ています (令和7年1月5日まで)。

(1) 地上レーザ計測やドローンを活用した森
林調査技術 (福島成樹)